

## 特集

## 薬学教育と漢方

## 序論

明日の医療につなげるための  
漢方専門教育はいかにあるべきか

雨谷 栄

薬学における漢方教育の重要性に関しては各大学の生薬・漢方関連の先生方を中心に十分認識されており、大学ごとに独自のカリキュラムが既に進行中です。しかしながら、臨床現場からの漢方教育に対する要望、モデルコアカリキュラム、生薬学の意義、国家試験など多様な問題が指摘されているのも事実です。

これらの問題を考える過程で、将来薬学教育の在り方を左右することになるかもしれない国家試験問題の方向性を、漢方教育に取り組む教育・研究者がしっかりと見極めていくことが重要であり、その過程で、漢方教育の標準化が議論されてもよいのかもしれません。

一方、約9割の医師が漢方薬を処方したことがあるという報告は、臨床現場で漢方に精通する薬剤師の必要性が益々高くなることを意味してお

り、漢方理論に基づいた臨床効果や、証に合致しない使い方に由来する副作用などを見極める能力など西洋医学とは異なる知識も併せ持つことが重要になります。

さらに、薬学における漢方教育は、生薬学、天然物化学、薬理学そして古典理論や臨床まで、かなり幅広い教育がなされており、漢方薬の特徴を考えると、いずれの領域も無視できない内容を包含しています。“モノ”としての漢方から臨床までの幅の広さを限りあるカリキュラムの中でいかに克服するかという課題もあります。

今回、「薬学における漢方教育」の特集を組むにあたり、各専門分野の先生方にご執筆をいただきながら、漢方教育の今後のあるべき姿、方向性などについて改めて考えてみたいと思います。